



長尾和宏 (ながお・かずひろ) 医学博士。東京医大卒業後、大阪大第二内科入局。1995年、兵庫県尼崎市で「長尾クリニック」を開業。外来診療から在宅医療まで「人を診る」総合診療を目指す。近著「薬のやめどき」は「痛くない死に方」は「いずれもベストセラー。関西国際大学客員教授。

あと、どれくらい生きられるのか？ 運命は誰にもわかりません。

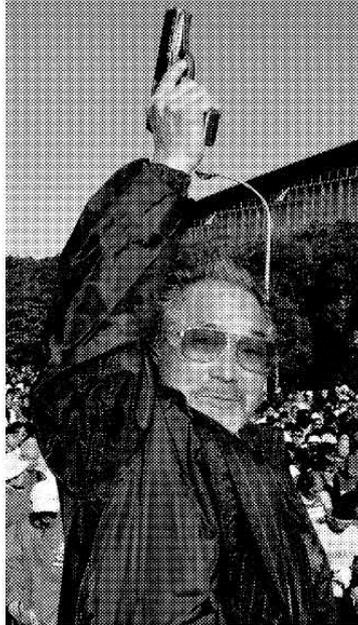
私は余命宣告という言葉が大嫌いです。生きている者は皆、残りの時間はすべて余命と思います。

在宅医療の現場では、持ってあと1、2週間かな...と思われる患者さんに、「じいちゃん、あとどれくらい生きられると思う？」と訊ねると、「もう歳やから、あと3年くらいかねえ」などと返されることも、よくあります。「そうかあ。じゃあ、俺が先に死ぬかもなあ」と返します。

「家族は笑いながらその会話を見守っています。いえ、泣き

自分の死期を悟り、大切な人に感謝を伝えた

105 小出義雄



笑いしながら、でしょうか。ただ、この人は自分の余命をちゃんと悟っていたようです。

女子マラソン金メダリスト(2000年、シドニー五輪)の高橋尚子さんをはじめ、世界に通用する女子陸上選手を数多く育てた小出義雄さんが、4月24日に千葉県内の病院で亡くなりました。80歳。死因は肺炎と

小出さんはここ4〜5年、心疾患を発症して入院を繰り返して、心臓ペースメーカーを装着していたようです。それから、大好きだったお酒をやめていました。しかし亡くなる1カ月前まで仕事はやめませんでした。

心臓ペースメーカーは、不整脈がある人の心臓に電気刺激を送り一定以上の脈拍を保つための、直径4〜5mmの医療機器です。植え込み後は、普段と変わらぬ生活を送れます。平均寿命も、健康な人とほぼ差はなく、1度つけたら死ぬまでずっと装着することが前提です。

小出さんの死因は心疾患ではなく肺炎とありますから、加齢にともない徐々に全身状態が弱っていったのではないかと想像します。

3月26日に自宅で倒れて救急搬送されて入院。一時は危篤

状態でしたが、一旦回復しました。そして、「俺はもう長くない」とかつての教え子たちに自ら電話。高橋さんや有森裕子さんをはじめ多くの愛弟子が病室に駆け付けて、しっかりお別れをしたそうです。

自分の死期を悟り、会いたい人に電話をかけて呼び寄せる：こんなことができる人は、なかなかいないでしょう。会いたい人に会えずにこの世を去る人のほうが、圧倒的に多いはず。しかも小出さんは、教え子一人ずつに「君がいて、僕の人生は豊かだったよ、ありがとう」と感謝の言葉を伝えたとか。高橋尚子さんには「北島三郎の『まつり』でも歌って見送ってくれ」とお願いしたそうです。

また、生前のインタビューでこのように話されていました。「マラソンは30歳から35歳を超えてからが本番なんです」

監督。人生も60歳を過ぎてからが本番でしょうか？ 大切な人に、感謝を伝えるための本番ですね。